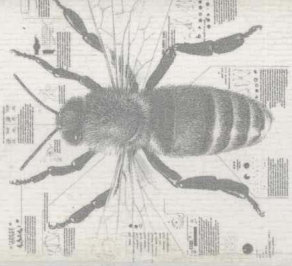
大きな蜂

THE BIG BEE IN THE BOUNDLESS SKY

KEIGO HIGASHINO



東野圭吾

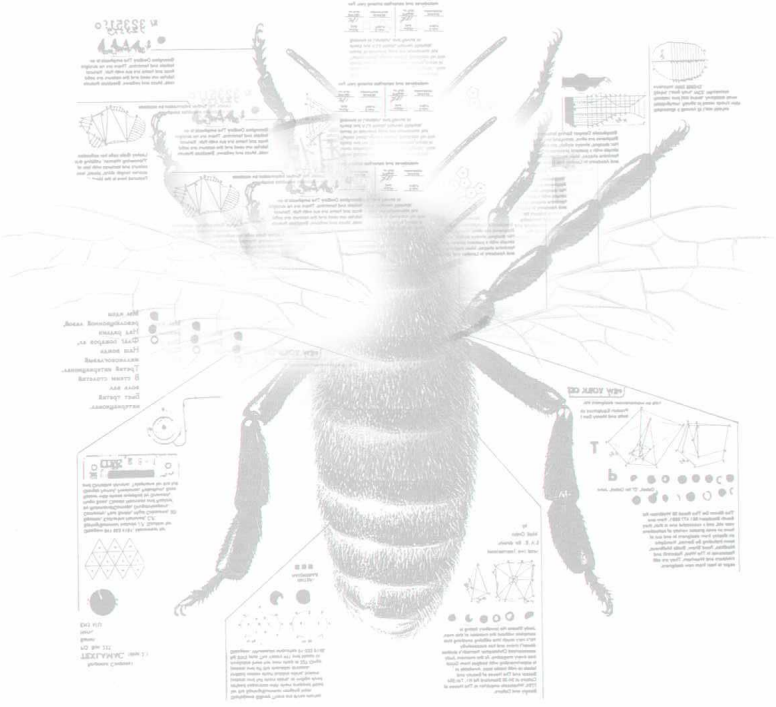
天空の蜂

THE BIG BEE IN THE BOUNDLESS SKY

KEIGO HIGASHINO

東野圭吾

講談社



東野圭吾（ひがしの・けいご）

昭和33年、大阪府生まれ。大阪府立大学電気工学科卒業。昭和60年第31回江戸川乱歩賞を『放課後』で受賞。著書に『変身』『学生街の殺人』『分身』『鳥人計画』『パラレルワールド・ラブストーリー』、エッセイ集として『あの頃ぼくらはアホでした』などがある。

天空の蜂（てんくうのはち）

一九九五年十一月十五日　第一刷発行

著　者　東野圭吾（ひがしのけいご）
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二-〇一
電　話　（〇三）五三九五―三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五―三六一二（販売部）
（〇三）五三九五―三六一五（製作部）

印刷所　廣済堂印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Keigo Higashino 1995, Printed in Japan

ISBN 4-06-207704-3　（文２）

天空の蜂

装画／寺澤　昭
装幀／亀海昌次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

午前五時ちょうどに電話は鳴りだした。その約一分前から腕時計と電話機を交互に睨(にら)みつけていた『彼』は、一度目のコールサインが終わらないうちに携帯電話の通話ボタンを押していた。

「もしもし」

「もしもし、ハチダさんのお宅ですか」男の声だった。

「そうです」

「俺だ」途端に相手の男の口調が変わった。声も一層低くなった。「今、終わった」

「お疲れさん」と彼はいった。「『彼女』の機嫌はどうだい？」

「すっかり上機嫌さ。これでもう俺のいいなりになってくれるはずだ」

男の声には余裕が感じられた。それを聞いて、さすがだなと彼は思った。

「それはよかった。安心したよ。今日の『デート』はうまくいきそうだな」

「いかせるさ。心配なのは天気だけだ」

「その点は大丈夫。ついさっき確認した。今日は快晴らしい」

「絶好のデート日和(びより)ってわけだな。そっちのほうはどうだ」

「準備は終わった。いつでもゲームをスタートできる」

すると相手の男は低く笑った。

「もうゲームは始まっているんだぜ」

「そうだったな。じゃあ次の連絡を楽しみにしているよ」

「オーケー」
電話が切れた。
彼は電話機をしばらく見つめてから、テーブルの上に戻した。思わず、深く長いため息が口から漏れた。
もうゲームは始まっている――そのとおりだった。もはや後戻りはできない。
数時間後には、すべてが始まるのだ。
彼はすぐ目の前にあるパソコンのＣＲＴモニターを見た。そこにはワープロで作成した文章が映し出されている。これを彼は三時間以上もかかって作ったのだった。そして何度も何度も見直しをしていた。
最後のチェックを終えた彼は、パソコンをそのままにして、畳の上に横になった。万一のことを考えて目覚まし時計を二つセットし、タオルケットをかぶる。たとえ二時間でも、眠っておいたほうがいいと思ったからだった。今日が自分の生涯で、最も長い一日になるであろうことを彼は知っていた。
しかし同時に彼は、たぶん自分は一睡もできないだろうとも思っていた。過度の緊張と興奮に包まれていることを自覚していた。そしてさらに、恐怖を感じていることも認めざるをえなかった。
またその一方で彼は、これから自分がやろうとしていることを、第三者のような醒めた気分で捉えてもいるのだった。これまでの堅実な人生と比べ、あまりに常軌を逸した行動であるがために、現実逃避しているのかもしれなかった。彼は瞼を閉じたまま、何度も自分にいい聞かせた。これは夢でも何でもない、現実なんだ、と。
間もなく窓のカーテンの隙間から、太陽の光が差し込んできた。今日も真夏日になることを予感さ

せるような強い光だった。その光に彼は頼もしさを感じた。日本列島が燃えるほどに暑くなればいいと思った。

彼は首を少し動かし、テーブルの上を見た。そこには小さな写真立てが置いてある。リュックサックを背負った小学生ぐらいの少年が、岩に登って笑っている写真が入っていた。少年の背後には、白いドーム形の建物が小さく写っている。

ほっと息を一つ吐き、彼はタオルケットを頭からかぶった。

2

午前七時を少し回ったところだった。錦重工業小牧工場の正門前に、まだ人影はなかった。灰色のアスファルト路面が、太陽の日差しを浴びて光っている。

湯原一彰は、正門をくぐったところでワンボックスワゴンを止めた。横の守衛室にいた男が怪訝そうに首を伸ばした。湯原は片手を上げて合図し、車から降りた。

首にタオルを巻いた守衛が守衛室から出てきた。彼の頭には白いものが混じっていた。この男も自衛隊あがりなのだろうと湯原は想像した。各所に配置された守衛だけでなく、独身寮の監長、駐車場の管理人、すべて退役した自衛隊員によって占められている。ああいうのも天下りというのかねなどと、社員たちは陰で囁いている。

湯原は胸のポケットからＩＤカードを取り出し、守衛のほうに差し出した。守衛は、そこに貼られている写真と彼の顔とを見比べた。もう少し遅い時刻であったなら、そして他の社員と同じように徒歩でここを通過するのであれば、これほど念の入ったことをされるはずはなかった。

「車の中にいるのは誰？」守衛がワゴンの中を顎でさして訊いた。退役軍人を雇うのは結構だが、せめて口のきき方ぐらいは知っている人間にしてもらいたいと、湯原は彼等と言葉を交わすたびに思う。

車の助手席では篤子が居心地悪そうに座っていた。後部席にいた高彦が、二つのシートの背もたれの間から顔を出した。

「妻と息子です」と湯原は答えた。「ヘリの試験飛行を見たいというものですから。許可はとってあります」

車の中の篤子が、タイミングよくハンドバッグから書類を取り出した。許可証だった。湯原はそれを守衛に渡した。

守衛は書類を一瞥すると、もう興味をなくしたような顔をした。「車を停める場所はわかってるね。勝手なところに停めたりしないように」

湯原は一つ会釈して車に乗り込んだ。

「毎朝、出社してくる人全員に、ああいうことをするわけ？」篤子が訊いた。

「部外者に対してはかなり厳しいね。何しろ防衛庁管轄だからな。でも通常の出勤時間帯なら、社員に対してはわりといい加減だよ。ＩＤカードさえ提示すれば、呼び止められることはないね。写真と顔を確認するなんてこともない。定期券を見せて改札口を通るような感覚だね」

「じゃあほかの人のＩＤカードを使うこともできるのね」

「まあね」

「物騒じゃない」

「だからこいつは肌身離さず持っているのさ」湯原は胸ポケットを叩いた。

錦重工業小牧工場の敷地は百二十六万七千平方メートルである。ここには航空機事業本部と呼ばれる部署が配置されていた。その名のとおり、航空機関連の研究を行ったり、部品や製品の製造をしている。しかし実際のところ、この事業部の取引の殆どは、無限に近い資産を持つ二つの組織を相手に成されていた。その組織の一つは防衛庁であり、もう一つは宇宙開発事業団だった。

先程湯原が守衛に見せたＩＤカードには、航空機事業本部技術本部回転翼機研究開発課と印刷されている。新型ヘリコプターの開発を主な仕事としているわけで、したがって彼等の上得意客は防衛庁ということになっていた。

正門をくぐると真っすぐな道が前方に伸びており、その両側に工場が並んでいる。湯原は車を直進させた。さすがにこの時間では、歩いている者もいない。もっとも現在この工場内に誰もいないわけではなかった。今日行われるイベントを前に、湯原と同様早朝出勤している者がいるはずだった。またこうしたイベントがないにしても、技術本館にある研究室の窓がすべて暗くなるということは、めったになかった。研究者というのは常に、早急に何とかしなくてはならない問題、というものを抱えているからだ。

湯原の運転するワンボックスワゴンは、やがてＴ字路にぶつかった。左右に走っている道路の向こうが試験飛行場だ。

飛行場の手前にある駐車場に湯原は車を停めた。車を降りるなり高彦は、金網にへばりついて中を覗(のぞ)いた。

「何もないよ」と彼は不満そうにいった。「お父さんのヘリコプターはどこにあるの？」

「まだ格納庫の中だよ」

「どれ？」

「あれだ」湯原は一番手前にある格納庫を指した。
錦重工業航空機事業本部には大小合わせて十個の格納庫がある。彼が指したのは第三格納庫と呼ばれるものだった。主に大型機体に使用する。
「ふうん」と高彦は金網に両手の指を引っ掛けたまま頷いた。
背後から軽いクラクションの音がした。振り返ると、白のクラウンが湯原たちの車に並んで停車しようとしていた。何年も前の型式のクラウンは、ぴかぴかにワックスがけされていた。今日を特別な日と考えているからだろう。山下らしいと湯原は思った。
「おはようございます。あっ、奥さん、先日はどうも」車から降りるとすぐに山下は何度も頭を下げた。やや太り気味のせいか、早くも顔の横からたらたらと汗を流していた。先日はどうもというのは、彼等の引っ越しを湯原たちが手伝った時のことをいっているのだった。一戸建の4LDKを二十五年ローンで購入した山下は、バルコニーがアーチ型をしていることを、職場の全員に自慢していた。
車の後部ドアから薄い色のブラウスを着た痩せた女性と、半ズボンを穿いた少年が降りてきた。山下の妻の真知子と一人息子の恵太だった。恵太は高彦よりも一つ下だ。親同士が挨拶している間に、少年たちは並んで金網にしがみつき、今は何もない飛行場にどんなすごい機体が登場するのか、それぞれの空想を披露し合った。
「僕たちはこれから技術本館のほうに行くから、君たちはあそこで休んでてくれないか。試験飛行が始まる前に呼びにくるから」湯原は篤子にそういって数十メートルほど先に建っている細長い建物を指差した。厚生センターと呼ばれる建物で、一階には売店があり、二階より上には会議室や懇談会用の和室などがあった。「売店はまだ開いてないかもしれないけど、飲み物の自販機ぐらいならあるし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

テレビも見られる」
「何より冷房が効いていますよ」山下がハンカチで額を拭きながらいった。
「ヘリコプターはいつ見られるの」篤子が夫に訊いた。無論彼女がヘリコプターに興味のあるはずがなかった。息子たちが退屈を持て余した時のことを懸念しているのだろう。
「あと一時間もしたら、整備係が格納庫からヘリを引っ張りだすと思うよ」
「飛ぶのは何時から？」
「一応九時ということになっている。相手次第だから、断言はできないけどね」
相手というのは防衛庁からやってくる人間のことだった。湯原が抱えている鞄の中には、彼等への説明用の資料が詰まっていた。昨夜の二時までかかって仕上げたものだ。
「仕方ないわね」篤子は真知子と顔を見合わせた後、まだ金網にしがみついたままの息子たちのほうを見た。「高彦、行くわよ」
「じゃ、後で」山下夫人にも軽く目礼してから、湯原は山下と歩きだした。技術本館は厚生センターとは逆の位置に建っていた。七階建てのビルである。
「奥さん、今日のことはあまり乗り気ではなかったんですか」山下が訊いた。
「まあね。高彦が見たいといいだしたものだから、渋々付き合うことにしたようだ。君のところはどう？」
「うちもそうですよ。ただ、父親の仕事を息子に見せること自体は有意義だと思ってるみたいですけどね」
「よくできた奥さんだ」
「亭主がただの無能な中年じゃないってことを、自分も確認したいんじゃないですか」山下は苦笑ま

じりにいった。
「こんなに苦労をかけられているんだから、それなりの成果を見ておかないとってわけだな」
「たしかに苦労をかけてきましたからね。帰宅は遅く、休みの日だってろくに家にいない。それじゃあ手当てがたんまりつくのかというと、大半がサービス残業ですからね。昨夜ちょっと思い返してみたら、家族揃って旅行に行ったのは、四年前が最後なんですよ。恵太が小学校に通う前です。これじゃあ夫としても父親としても失格といわれても仕方ありません。会社にばかりサービスして、家族にはさっぱりということです。先日買った家にしても、物件選びからローンの手続きまで、全部真知子任せでした。たぶん、当分は女房に頭が上がりませんよ」
「耳の痛い話だなあ。俺のところも大して変わらないよ」
自分たちは、いつ家族旅行をしたかなと湯原は考えた。海水浴に連れていったことは覚えている。だがそれがいつだったかは思い出せなかった。
湯原一彰が錦重工業に入社して十六年になる。大学で電気工学を学んだ彼は、航空機全般の電気系統に関する研究開発に携わってきた。特に操縦系統を機械的なものから電気信号に置き換えたシステム、いわゆるフライバイワイヤの研究を主なテーマとしてきた。入社五年目には民間機の共同開発プロジェクトのメンバーに選ばれ、四年間、シアトルで新型旅客機の操縦系統の研究を行った。
篤子と結婚したのはシアトルに行く直前だった。ほかの会社でＯＬをしていた彼女とは友人の紹介で知り合ったのだが、正直なところ彼としてはまだ結婚のことまでは考えていなかった。だが自分が外国へ行く以上、なんらかの結論を出さなければならなかった。
そんな湯原を決意させたのは篤子の態度だった。彼がアメリカに行かねばならなくなったという話を聞いた時、彼女は顔を輝かせて、素敵ねといったのだ。その表情を見て、湯原は半ば衝動的に、君

も一緒に行くかいといってしまった。深く考えて発した言葉ではなかった。だが当然のごとく篤子はそれをプロポーズと解釈した。そして彼も撤回はしなかった。よし、これをプロポーズにしてしまおうと思ったのだ。

彼女は、一日だけ考えさせてといった。しかしその後ずっと浮き浮きとしていたから、おそらくその時点で答えは出ていたのだろう。

湯原は後悔はしなかった。篤子の外見も、小さなことにこだわらない性格も気に入っていた。知らない土地へ一人で行くより、あれだけ輝いた表情で渡米の話を聞いていた彼女を連れていったほうが、きっと何倍も楽しいだろうとも思った。

ただ見方を変えるならば、それだけ彼は結婚というものを重視していなかったともいえるのだった。その頃彼はそれを、「人生における面倒な手続きの一つ」と思っていた。手続きだから、早く済ませたほうがいいというのが彼の考えだった。それをぐずぐず長引かせると、周りからとやかくいわれたり、相手探しに奔走したりと余計な精神的苦労を味わわなければならず、結果的に満足のいく仕事もできなくなるのだと思っていた。

篤子と生活するうちに、湯原のこの考えはかなり改善されてはきたが、それでもやはり根底にあるものは変わっていなかった。高彦が小学校に入学する前、彼は珍しく買い物に付き合ったが、息子のランドセルを選びながらも、航法装置に関する特許のことを考えていたのが何よりの証拠だった。

自分が篤子を選んだことは正解だったが、彼女のほうはあまり良いクジを引かなかったのではないかというのが、これまでの生活を振り返っての感想だった。特にアメリカから帰ってから今日までの数年間は、山下のことを笑えるようなものではなかった。

「まあとにかく」と山下はいった。「今日が終われば一安心ですよ。少しは人間らしい生活もできて、

家族サービスの真似事もしてやれるんじゃないですか」
「そう願いたいね」湯原は心の底から同意した。
そうだ今日が無事に終われば、と思った。無事に終わることを祈りたい気分だった。
『Ｂシステムプロジェクト』がスタートした日のことを彼は思い出していた。概念設計が防衛庁に提出されたその日から、自分の生活を犠牲にする日々が始まったのだ。
技術本館に入ると、二十四時間無人になることのない受付窓口に向かって湯原は片手を上げた。受付にいたのは顔馴染みの守衛だった。就業時間内ならば、総務課の人間が座っているところだ。
受付のすぐ先には防犯ゲートが並んでいる。自動改札機のようなものだ。湯原はＩＤカードを取り出し、ゲートの手前にあるスリットに通した。スリットの上のランプが赤から青に変わった。
ゲートは金属のバーによって閉じられている。湯原はそのバーを押すようにして進んだ。バーは抵抗なく開いた。山下も同じようにして、隣のゲートから入った。こんな物々しい手続きも、防衛庁の機密を扱っていることを考えれば当然だった。

厚生センターの売店はやはりまだ閉まっていた。営業は八時からですと書いた札が立てられ、その向こうはシャッターが下りていた。篤子と真知子は自動販売機でコーヒーを買い、近くのベンチに腰を下ろした。それぞれの息子たちもジュースを飲んでいたが、おとなしくしていたのは紙コップが空になるまでのわずかな時間だけだった。二人はまだ人気のない休憩室内の探検を始めた。
篤子は真知子とは夫同士が職場の同僚ということで知り合ったのだが、同い年ということもあり、ふだんから親しくしていた。山下真知子はおとなしそうに見えるが、話をしているうちに意外と大胆な一面があることを知らされたりするので、彼女とおしゃべりするのを篤子は今日も楽しみにしてい

た。正直なところ、夫がどんな素晴らしいヘリコプターを開発したのかということには興味がなく、機体完成時のお披露目ショーに、主要関係者が家族を同伴するというこの会社独自の慣習のことを鬱陶しく思っていた。高彦が赤ん坊のうちはなんだかんだ理由をつけては断っていたのだが、その息子が行きたいと主張するのでは、逃れようがなかった。

「だからやっぱり聡明進学スクールのほうがいいの。光和学習塾なんて、授業料が高いばっかりで、教育方法だって古いみたいだし全然だめ。合格率だって、このところずっと落ち気味だし」真知子が小さな声で、しかし早口でいった。紙コップのコーヒーを膝の上で両手で持ち、背中をぴんと伸ばしている。

「でもこの間、光和の広告に合格者一覧が載ってたけど、なかなかのものだったわよ」

「チラシ広告でしょ？　あたしも見た。あれはね、光和学習塾の模擬試験を一度受けただけっていう子供も含まれているんですって。大学の予備校がよくやる手よ」

「なあんだ、そうなの」

「ええ、だから、恵太には聡明進学スクールのほうに行かせようと思ってるの。あそこで発表している数字は正味だっていう話だから」そして真知子はコーヒーをぐいと飲んだ。

二人の主婦の会話は、子供の話からファッションの話になり、それぞれの趣味に関するエピソードを迂回した後、また子供の話に戻った。彼女らの夫に関する話題は、ほんの申し訳程度に顔を覗かせただけだった。まして彼等が開発したヘリコプターのことなど、彼女たちの頭の隅にすらなかった。

会話に熱がこもっている時、高彦がそばに寄ってきた。

「ねえ、外に出てもいい？」

「どうして？　ここにいたらいいじゃない。テレビを見てなさい」

「面白いのをやってないんだもの。ねえ、ちょっとだけ」
どうしようという目で篤子は真知子を見た。いいんじゃないかしら、と相手の目は答えていた。
「仕方ないわねえ。あまり遠くに行かないでね。探しに行くの大変だから」
「うん、わかってる」高彦は出口に向かって駆けだした。その後を恵太が追った。
二人の少年が出ていくのを見送ってから、彼等の母親はおしゃべりを再開した。

厚生センターを出た高彦と恵太は、先程と同じように試験飛行場との境界になっている金網に取り付いたが、依然として飛行機もヘリコプターも姿を現さないので、やがて飽きてきた。
高彦は第三格納庫を見ながら金網沿いに歩いた。恵太も後をついてくる。
「あそこにお父さんたちが作ったヘリコプターがあるんだって」高彦がいった。
ふうん、と恵太は鼻を鳴らした。
さらに進むと、金網を通過する出入口があり、今はそこの扉が開いていた。高彦は周りを見た。誰からも見られていないようだった。高彦は金網の内側に足を踏み入れた。恵太もついてきた。
「お父さんたちには内緒だぞ」と高彦はいった。恵太は黙って頷いた。
外部電源用車両や燃料トラックの陰に隠れながら、二人は第三格納庫に近づいた。カマボコのような形をした、巨大な建造物だった。まだ誰もいないのか、中から物音は聞こえてこない。
ドアがあったので、高彦はノブを回してみた。しかし鍵がかかっていて開かなかった。彼は建物の壁に沿って歩き、並んでいる窓の一つ一つに手をかけていった。窓ガラスは半透明で、中を見ることはできなかった。
どの窓も施錠してあり、もはや中を覗くのは無理だと諦めかけた時、一番端の窓が何の抵抗もなく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com